

# 生徒の命に向き合う～「ハートほっとウィーク」の試み～

熊本県立ひのくに高等支援学校

本校では年2回、個人面談週間「ハートほっとウィーク」を設定しています。生徒と直接向き合う時間を確保したうえで、いくつかの工夫をしています。結果、全職員で、生徒の「心」に、ひいては「命」に向き合うよい機会となっています。ここでは、その導入の背景と取組の工夫、及び成果について報告します。

## 「ハートほっとウィーク」導入の背景

本校は、軽度の知的障がいのある生徒を対象とする特別支援学校です。その課題の一つとして、生徒の「心理的な安定」を図ることが挙げられます。心理的な安定を欠くと、さまざまな行動上の問題を引き起こす恐れがあるからです。

そこで、本校では平成22年度から、校内での教育相談を担当する専任の教員を配置して、「ハートフル相談」と名付けた取組を行ってきました。相談したい生徒は、申込用紙に氏名だけを記入し、校内に設置したポスト(左下写真)に入れます。それを受けて、担当者が時間と場所を設定し、個別の相談を行うというものです。申込は



年々増加し、昨年度は延べ94回を数えました。適応指導やストレスマネジメント学習の機会ともなり、一定の成果をあげてきたと言えます。

一方で、時間や場所の確保、担当者の負担過多等の課題が浮き彫りになってきました。その課題解決のための取組として、平成24年度から導入したのが「ハートほっとウィーク」です。

## 「ハートほっとウィーク」の成果

「ハートほっとウィーク」は、その目的を「生徒の抱える悩みや問題を早期に把握し、解決に向けてのアクションを起こす一助とする」として導入したものです。25分では問題解決には至らないことが多いと考えたからですが、実情は違っていました。生徒に対する検証アンケートでは、過去4回とも「話してよかった」群が95%を超えましたし、自ら発信することが苦手な生徒にとっては、「SOSサイン」を出す場となったのです。その意味では、「いじめ防止対策」の1つとしても機能していると考えられます。

## 取組の工夫

「ハートほっとウィーク」は、生徒全員(本年度は104人)を対象とし、時間を確保するために、月曜から木曜までの6限をカットし、それぞれに25分のコマを3つ設けています。面談者は原則として担任ですが、生徒の希望があれば、専門学科の担当者、進路指導担当者、教育相談担当者等を選べるようにしました。個に応じ、できるだけ相談しやすい状況を作るための配慮ですが、ほとんどの職員が面談を担当しますので、事前に「教育相談のあり方」というテーマで職員研修を行っています。



また、3つの機能を持つ「面談カード」を用います。それは、①事前に生徒が自分のプロフィールや相談したいことを記入する、②面談中は面談者が面談内容を記録する、③それを用いて事後の情報共有も行う、というものです。情報共有は、面談者・生徒・正副担任・寄宿舎指導員・保護者のうち、生徒本人が了解した範囲としました。プライバシーに対する配慮です。

